

年の始まりに…身近な自然のこと 考えてみましょう

「東京のふるさと・あきる野」広報などで目にすることが多い言葉だと思います。私も、あきる野市は東京都でありながら貴重な野生動物が生息する豊かな自然が身近にあり、自然と人が共生している姿を色濃く残している場所だと感じています。

私が見てきたあきる野の自然は、四季の移ろいがとても美しく、生き物たちの命のつながりが輝いています。そして、自然の中で生きる人や遊ぶ人も生き生きとしています。自然は私たちに多くの恵みを与えています。

しかし、私たちにとって自然は、美しく恵みを与え

てくれるだけの存在ではありません。自然との関わり方を一歩間違えると、ケガをしたり、時には命を落とすこともあります。だからといって、人に都合のいい部分だけを見つめ、都合の悪いものを排除するのではなく、ありのままの自然を認め、関わり、覚悟する必要があると思います。なぜなら、私たちは自然がなければ生きていけないのですから。

東京のふるさととして、次世代に残していかなければいけない自然を、多くの視点を持って一緒に考えてみませんか？



ニホンジカの食痕
植樹した花粉の少ないスギ



ニホンイノシシの痕跡
広場が掘り起こされている



ツキノワグマの食痕
収穫前のキウイ



市域の森の約7割が針葉樹
色づいているのは落葉広葉樹



針葉樹の多くの森は
手入れもされず暗い

自然を
昔に戻す会の
森づくり

森林レンジャーが行う
森づくり



自然を昔に戻す会の活動
実生から苗を育てる



実生から育ったコナラなどの
苗木(4~5年生)



荒れた竹林を整備し 竹炭と竹酢液を
作っている(瀬音の湯などで販売)



生物多様性を見ずえた植樹
クリなど実をつける木々を奥山へ

コナラのドングリが実り始める9月、チョッキリ(昆虫)がドングリに卵を産みつけ地面に落とします。昨年は、チョッキリの落とすドングリが少なかったこともあり、ドングリの凶作年であることを予測したと同時に、イノシシの痕跡が標高の低い場所で例年より早い時期に見られたため、森の変化と人里への影響が大きくなることを心配していました。

晩夏から野生動物は冬に備えてたくさんの食物を必要とします。この時期の野生動物にとって、ドングリなどの果実は重要な食物となっていますが、市域の森林には実をつける広葉樹や草花が少なく、約7割を針葉樹が占めています。その針葉樹の森は、一部では広葉樹や花粉の少ないスギへの転換が進められてい

ますが、手入れがされず下草も生えない暗い森が目立ちます。

ドングリが凶作だった今冬は多くの野生動物が食物不足で困ることでしょう。自然はつながりを持って成り立っていますから、人が木を植えたまま管理を放棄した森によって野生動物は苦しんでいます。また、森で生きられず人里へ現れ、私たちの暮らしにも影響を与えます。野生動物がかわいそう、害獣だという視点だけではなく、私たちができること・しなければならぬことを考え行動することが必要です。豊かな自然を次世代へ残していくために、人が暮らししていくために、これまでの活動を継続していきながら、今年は新たな森づくり活動を始めていきます。 [加瀬澤]

冬の展望台



見晴らしのいい季節

寒い時期は色々と不便なことが多いのですが、冬の楽しさを考えてみると少しだけ過ごしやすくなります。例えば、自然の変化に伴い、この季節にしか現れない色や景色を味わうことができます。

あきる野の山々からは、西側と東側の風景が同時に楽しめることが一つの特徴です。その西側には山並みが複雑に伸び、連なりながら、遠く富士山まで見渡せるスポットも沢山あり、目で大自然を楽しめます。一方、東側の風景は多摩地域や都心部が広がり、東京湾をはさんで房総半島も見渡すことができます。

市内の山々からの冬景色を見逃さないようにご注意ください。



馬頭刈山頂手前から東側の風景。冬の晴れた日には東京スカイツリーがはっきりと見えます。(写真は望遠カメラで撮影)



金比羅尾根にある富士見スポットからの様子

命の場所

かつて市内の丘陵地域には、ヤマアカガエルやツチガエル、トウキョウサンショウウオなどの両生類が多く生息していましたが、現在、捕食被害や産卵場所の減少などにより、多くの種が絶滅の危機に瀕しています。20年前と比較すると、個体数が急激に減少した場所、さらには個体群が完全に消滅した場所も少なくありません。

自然の保護や再生のため、我々森林レンジャーは森林環境の整備をすることがあります。今回紹介するのは、市民の有志の方々と協働で整備したビオトープです(右写真)。埋まってしまっていた谷津田跡の一段を利用し、約3×6mの池を造成しました。土留めや小動物の隠れ場を配置しながら、水循環や水深にも注意し、最適な水場ができました。

早春の産卵期を控え、両生類などの活動が少ない冬期は、産卵場所の整備などのために最適な時期です。今後、このビオトープは周辺にまだ生息している両生類や昆虫などのため、重要な産卵場所になると予想しています。正しく、森の命の起源となるように期待しています。



冬の草原などを訪れ、餌を採食しながら冬を越すベニマシコ(オス)

冬羽物語

12月に入ってから厳しい寒波が日本列島に広がったことに伴い、冬の季節に渡ってくる鳥たちも種類、個体数ともに圧倒的に多くなってきています。

秋の初めは、ジョウビタキが多く確認されましたが、11月になり気温が本格的に下がってからは、ルリビタキやシロハラ、ツグミなども増加しました。今年は、ウソ、シメ、イカルやキクイタダキなどが例年より比較的多く観察されていることが目立ちます。

冬がとても寒い年には、関東で普段は見られない鳥類の現れる確率が増えることから、バードウォッチングをする楽しみも倍増します。

暖かくして、冬の自然を観察してみよう！

[パプロ]



森っこザンちゃん